

## 洪水のまち

横山光紀

二〇一一年にタイ・バンコク首都圏を襲った大洪水は、水没した日系企業の工場群や空港の映像と共に大きく報道され、タイ工場での生産休止が日本や世界各地に波及することを目の当たりにした。日本では大震災があり、毎年、世界のどこかで地震や台風、洪水などの自然災害は起きているからタイの大洪水もそれら自然災害のひとつに過ぎないともいえるが、好天で雨も降っていないのに水かさが増して溢れ出る川や運河を見て、日本とはちがうかたちの自然の力を感じた。当時、バンコクを貫くチャオプラヤー川沿いの高層アパートに住んでいたので、川の水位が上昇し満潮時には溢れ出る様子をベランダからまさしく高みの見物をしていた。

一〇月に入りバンコクの北方から市街地への浸水がはじまると、どこまで浸水域が拡大するのか政府とバンコク都庁の情報が錯綜し、ついに政府の対策センターや避難所までもが浸水し

た。多くの建物や住宅では入り口に土嚢を積み、ブロックで壁を作るところも現れた。浸水がひどい地域では、一〜二カ月も汚水が滞留し、排水を巡り住民間の対立も起きた。テレビでは連日浸水域の様子が放送され、「家に水がきたか」、「：地区は浸水したぞ」と洪水の話題が挨拶代わりになったが、自分の家が被害を受けるまでは面白がっているように聞こえなくもない。

一九日の夕方、友人から電話があり「俺の家が浸水しそうだ」というので、車でどこまでいけるか分からないが、とりあえず様子を見に行くことにした。家に近づくとき大通りは普段と変わらないが、路地はすでに冠水している。近くに大きな運河があるからそこが溢れたのだろう。冠水した道路をゆつくり走っていると車底に水がバタン・バタンとあたり、今にも車内に浸水しそうな勢いである。道路より高くなっている病院の駐車場に車を停めた。普段は騒々しい道路が文字通り水を打ったように静かになり、一帯は屋内プールの中にいるような水のおいがある。友人の家は二〇軒ほどの家が集まって高い塀に囲まれたコンパウンドの中にある。門前に土嚢が積まれ、その前の水位は五〇センチほどになっていた。幸いこの水は汚れていないので水の中を歩き、梯子で塀を乗り越えて敷地に入り、友人宅に向かった。するとまだ夜九時なのに大学生の子供二人は二階で寝ていて、友人はソファアでテレビを見ている。部屋の中は片付けた形跡はない。逆にこちらが焦って運べるものは二階に運ぼうと提案しているのに、ピアノも冷蔵庫も重いから運べない。マイペンライ（しょうがない）。食事でもしよう。というところで、手伝いに来たのにご馳走になった。マ

イペンライとはこのような時にも使えるのかと感心しつつアパートに戻ったがその夜のうちに門前の土嚢が崩れてコンパウンドは浸水し、一階にあつた家財一式と車が水没してその後一カ月以上水が引かなかった。翌日この顚末を聞き、タイ人は物に執着しない人たちなのかと感心した。

翌週、別の友人宅が浸水した。この家には洪水から避難してきた親戚がいると聞いていたので、食料をリックにつめて行ってみた。ひざ上まで水に浸かっているのに屋台はいつもと同じ場所で営業していて食事をしている客がいる。今度は真っ黒な汚水なので浸水している路地に入るのを躊躇していると、手製のボートを漕いで友人が通りに出てきた。手伝いを申し出ると、家財道具は二階にあげたから大丈夫。このあたりは下水やトイレが溢れていて汚いから入ってこないほうがいい。といわれ食料だけを手渡した。後日、家財一式と車を水没させた友人の話をしたところ、ちよつと変わった人だね。みんな大変なんだよ。といわれた。おつしやる通りです。

三〇日、ついに私のアパートの周辺も浸水がはじまった。チャオプラヤー川から溢れた水が川岸にある魚市場や造船所を通じて住宅地に流れ込み一帯は騒然となった。軍隊も出動して川岸に住んでいる人たちの救出にあたつたが、幸いなことには水は数時間で干潮と共にひいた。

チャルンクルン通り



よこやま みつのり／アジア経済研究所 研究支援部

2008年8月から2012年9月までジェトロバンコク事務所勤務。